

2022年横浜ナザレン教会・復活後第三主日(5/8)礼拝

[命への導き手]

使徒言行録第3章1節から第3章16節

【聖書】

使徒言行録 3:1 ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。2 すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。3 彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。4 ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。5 その男が、何かもらえると思って二人を見つめていると、6 ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」7 そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、8 躍り上がって立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。9 民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。10 彼らは、それが神殿の「美しい門」のそばに座って施しを乞うていた者だと気づき、その身に起こったことに我を忘れるほど驚いた。

11 さて、その男がペトロとヨハネに付きまといっていると、民衆は皆非常に驚いて、「ソロモンの回廊」と呼ばれる所にいる彼らの方へ、一斉に集まって来た。12 これを見たペトロは、民衆に言った。「イスラエルの人たち、なぜこのことに驚くのですか。また、わたしたちがまるで自分の力や信心によって、この人を歩かせたかのように、なぜ、わたしたちを見つめるのですか。13 アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、わたしたちの先祖の神は、その僕イエスに栄光をお与えになりました。ところが、あなたがたはこのイエスを引き渡し、ピラトが釈放しようとしていたのに、その面前でこの方を拒みました。14 聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦すように要求したのです。15 あなたがたは、命への導き手である方を殺してしまいましたが、神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。わたしたちは、このことの証人です。16 あなたがたの見て知っているこの人を、イエスの名が強くしました。それは、その名を信じる信仰によるものです。イエスによる信仰が、あなたがた一同の前でこの人を完全にいやしたのです。

1 ペトロの説教

少し長めの聖書を読みました。ルカはさりげなく書いていますが、今日の物語は不思議な展開です。ペトロとヨハネは、美しい門のそばで奇跡の癒しを行いました。が、二人は何事もなかったかのように、内庭に入り神殿で祈りをささげ、仲間達が集まる「ソロモンの回廊」に戻って行きます。生まれながらに足が不自由で物乞いをしていた男は、癒された嬉しさに躍り上がり歩きまわり、神を賛美して、ペトロとヨハネのそばを離れません。これを見て吃驚仰天した人々は、一体何があったのか確かめるために、ペトロ達のいるソロモンの回廊へと

駆け付けました。ペトロは、その群衆に対し、「私たちは、イエスの名によってこのような癒しを行えるのです。どうか皆さん、どんどん人を連れて来ててください。」と呼びかけたわけではありません。そうではなくて、ペトロは集まって来た人々に語り始めました。説教をしたのです。この癒しを行った方、イエス・キリストを証する説教です。教会が聖霊を与えられたのも、主の証人になる為でした。だからこそ、ペトロは、真っ先に「この癒しは、自分達の力によるものでも、自分達の信仰の力でもない」と断言するのです。彼らが証すべきは、主イエスであり、自分達ではないから。そうして始まる12節から26節の説教は、印象深い言葉で真理が語られた説教、神の驚くべき恵みを湛えたものだと言われています。今日は、その前半部分、16節までを見ていこうと思います。

2 救い主を拒む罪

ここでのペトロの語り口は非常に厳しいものです。「あなたがたはこのイエスを引き渡し、ピラトが釈放しようとしていたのに、その面前でこの方を拒みました。」ここでローマ帝国総督のピラトの名前が出てきます。神を知らない外国人でさえ、イエスを釈放しようとしたのに、神の民であるあなたがたは、それを拒否した。と言い、外国人でさえためらうこと、無実の人間を十字架に架けて殺すという凶悪な罪を、こともあろうに神の民イスラエルが犯した、と強調します。更に「**聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦すように要求した**」、「聖なる正しい方」と、「穢れて不法な殺人者」という正反対の言葉を使って、畳みかけるように、彼らの罪を鮮やかに描き出します。又、「**赦すように要求した**」を直訳すると「神の恩恵を与えるように要求した」です。ペトロは次のように言っているのです。「神の民が、神の恩恵を与えるようにピラトに要求すべきなのは、『聖なる正しい方』ではないのか、それをこともあろうに、あなたがたは真逆のことをした。命を奪った重罪を犯した不正な殺人者に神の恩恵を与えるように要求し、聖なる正しい方を拒否するとは！」ペトロは、エルサレムの人々が犯した罪を遠慮なく率直に語っています。

しかし、彼は決して一方的に責めているわけではありません。何より私がそうだった、私もこの邪な犯罪に加わった、誰よりも主イエスは聖なる正しい方だと知っていたのに！13節と14節で「拒んだ」という言葉を繰り返している事から分かります。ペトロは、三度完全に、イエスを拒んだ自分の罪を忘れてはいません。

そうです。教会は、自分達は神を拒む罪びとであった、ということを忘れて、イエス・キリストを拒むこの世の人々を一方的に裁くようなことはしません。エルサレムの人々の、ねじ曲がった邪悪な行動を告発するペトロの言葉が鋭いのは、ペトロ自身が自分の罪をよく知っていたからです。

3 命への導き手

どうしてペトロは、自分の罪をよく知っていたのでしょうか。「命への導き手」と出会ったからだと思います。15節「**あなたがたは、命への導き手である方を殺してしまいました**が、

神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。わたしたちは、このことの証人です。」とある通りです。ペトロは、十字架の死から復活した主イエス・キリストと出会えたからこそ、自分の背きの罪が赦された、と知りました。その赦しの中で、改めて自分の罪の深さを知りましたが、それは、自分の罪を押し流す主イエス・キリストの愛の深さ、大きさ、高さ、広さを経験する事でした。そのペトロが主イエスのことを呼んでいる「命への導き手」という印象深い言葉、この言葉には、色んな訳があります。「命の君」「命の王者」、「命の支配者」、「命の創始者」などなどです。

では、主イエス・キリストが新しく始めた命、主が力を奮い支配する命、主が導いてくださる命とは、どういう命なのだろうか、そう考えている時、谷川俊太郎さんの「生きる」という詩と出会いました。この詩は、次のように始まっています。

「生きているということ
いま生きているということ
それはのどがかわくということ
木もれ陽がまぶしいということ
ふっと或るメロディを思い出すということ
くしゃみすること
あなたと手をつなぐこと」
少し長いので割愛して、最後はこうです。
「生きているということ
いま生きているということ
鳥ははばたくということ
海はとどろくということ
かたつむりははうということ
人は愛するということ
あなたの手のぬくみ
いのちということ」

谷川俊太郎さんは、「人は愛してこそ、生きている、と言える」と歌っているようです。かたつむりが、誰に教えられなくともはうことができるように、人も元来、愛し合うよう造られている。誰とでしょうか。誰を愛し誰に愛されるために生きているのでしょうか。

聖書は、他でもない、父なる神に愛され神を愛するために私たちは生きている、と語りまします。言い換えれば、「我が愛する子よ」という父なる神の呼びかけを聞き、「アッバ、お父ちゃん」と答えるために生まれて来た、と主イエス・キリストの十字架と復活の出来事は私どもに教えてくださるのです。神は、そのような愛し合う関係を私たち人間と築くために、この世界を造られ、私たちを造られたのだから。

けれども、私たちは、神を神として畏れ敬い、「アッバ、お父ちゃん」と呼ぶよりも自分達が神のようになろうとしました。神を敵としてしまいました。神が敵となった時、隣人との信頼関

係も崩れてしまった、アダムとエバの物語は私たちにそう教えてくれます。だから、愛し合えない、差し出された手を振りほどく、手を差し出すよりは、足を引っ張ってしまう、そうして、私たちは自分が生きている意味が分からなくなったのです。神を見失った時、命への道をも見失い、迷子になってしまいました。そんな私どもに、命への道を確かに示してくださるのが、主イエス・キリストだ、とペトロは語っています。

「命への導き手」である主イエスは、曲がってねじれて歪んで、切れそうになった神への道を、まっすぐで強く太く美しい道にするために、この世界に人となって来られました、私どもが父なる神を愛し、自分を、隣人を愛する道を歩めるために、です。

4 僕として仕え抜く勝利

その為に、主イエスは、僕として仕え抜かれました。13節に「神は、その僕イエスに栄光をお与えになりました」とある通りです。ここで「僕」と訳されているギリシャ語は、「子ども」とも訳せる単語で、「その子イエスに栄光をお与えになりました」ともとることができます。そして、「栄光を与える」という言葉には、「勝利を与える」という意味があります。神は勝利の栄光を主イエスにお与えになったのです。それは、どのような勝利なのでしょう。

僕のように仕えることによる勝利です。主イエス・キリストは、私ども一人一人が、神の子としての命への道を生きるために僕として徹底して神に従いぬかれました。その姿は、十字架の主イエスのお姿に描き出されています。父なる御神は、十字架という最も過酷で徹底した絶望しかない場所に、主イエスを置き去りにして、見捨てました。決して助けようとはされなかった。そうでもしなければ、人間が神になろうとする罪を贖い切ることは出来ないから。主イエスもその事をご存じでした。しかし、それでも、主は、最後まで、自分を見捨てる神を神として呼び求め続けます。父なる神から与えられた僕としての在り方を、主は十字架の上にあっても貫き通されたのです。この主イエス・キリストの神への服従、信仰を良しとされて、父なる御神は、主イエスを永遠の命へと甦らせませす。

だから、ペトロは語るのです。「あなたがたの見て知っているこの人を、イエスの名が強くなりました。それは、その名を信じる信仰によるものです。イエスによる信仰が、あなたがた一同の前でこの人を完全にいやしたのです。」主イエスご自身の揺るぎない信仰によってもたらされた、甦りの命の力が、足の不自由な男の上に現れました。男が癒されたのは、使徒の信仰でも、この男の信仰の力でもありません。自分を見捨てる神をも神として従いぬいた、主イエスの信仰によって、足の不自由な男は癒されました、救われました。

それは、第三章の1節から10節を読んでも分かります。この男がしたことは、差し出されたペトロの右手、つまり、主イエス・キリストの右手を拒まず、自分の全身を、命への導き手に委ねて立ち上がろうとしたこと。それだけです。しかし、それだけの信仰でしたが、そこにキリストの力が働き、男のくるぶしを強くし新しい命へと立ち上がらせました。命への導き手に従っていく足を与えられたのです。

5 教会の礼拝

古い言葉ですが、「名代」という言い方があります。偉い人の名をあげ、その代理人として務めを果たす人のことを言います。私ども教会も、聖霊の御力により、ナザレの人・イエス・キリストの名代として、その御名によって、右手を差し出します。まだ、神を知らず神の愛を知らない、自分が何者で、何のために生きているか分からない人々、かつて自分達と同じようにキリスト・イエスを拒んでしまう人々に、イエス・キリストの名代として右手を差し出します。そうして、主イエス・キリストの救いの御業を最も身近で経験し、証人として成長して行く群れ、それが教会です。その役割にふさわしく整えられるべく、私たちは、今、礼拝をささげています。

礼拝とは、英語で、サービスと言います。奉仕です。私たちが父なる御神に対して行うサービス、奉仕、という意味合いがあります。が、先ず何よりも、神の独り子イエス・キリストが私たちに、礼拝で仕えてくださっていると言うことを示しています。神の子が仕えてくださり、聖霊なる御神を私どもに与えてくださるからこそ、私どもはキリスト・イエスの名代として、この世に出ていき、主イエスの証しをしていくことができます。だから、教会は礼拝を欠かさないのです。

一人でも多くの方が、神を礼拝する場で、私どもを愛し抜かれる命への導き手、命の王者なるイエス・キリストを知ることができますように、父なる御神の愛の呼びかけを聞き、これに応える喜びの命への道を見出すことができますように、その為にどうか私どもを聖霊でみたくしよめ用いてくださるように、と祈り願わずにはおられません。